

県営ほ場整備事業（昭和56年度）
埋蔵文化財緊急発掘調査報告

十王堂坂の上

1982

長野県上伊那郡飯島町
南信土地改良事務所



序

飯島町においては、昭和48年より県営ほ場整備事業が開始され、今年度は七久保地区第27工区が実施されています。

当地籍は、古利西岸寺の北側にあたり、古くから集落が発達した地域であり、文化財保護の立場から飯島町遺跡調査会に依頼し調査を行いました。

幸いにも南信土地改良事務所の御配慮と、県教育委員会文化課の御指導の下、優秀なる調査団の先生方により大きな成果をあげられたことは、感謝にたえません。

出土品については、飯島町陣嶺館に展示し一般の方々に見ていただく予定です。

調査報告書の刊行に当って関係各位に対し心から謝意を捧げる次第であります。

昭和57年3月20日

飯島町教育委員会

教育長 熊崎安二



目 次

序

目 次

挿図目次・図版目次

第I章 遺跡の概要と調査経過	1
1. 遺跡の立地	1
2. 歴史的環境と調査経過	1
第II章 遺 構	3
1. 住居址	5
2. 土 城	17
3. その他	18
第III章 遺 物	19
1. 土 器	19
2. 石 器	20
3. その他	20
第IV章 まとめ	30

挿図目次・図版目次

第1図 位置図 (1: 100,000)	1	第2図 地形図 (1: 2,000)	2
第3図 遺構配置図 (1: 600)	3	第4図 A 1号住居址 (1: 80)	5
第5図 A 2号住居址 (1: 60)	6	第6図 A 3号住居址 (1: 60)	7
第7図 A 4号住居址 (1: 60)	8	第8図 A 5号住居址 (1: 60)	9
第9図 A 6号住居址 (1: 60)	10	第10図 B 1号住居址 (1: 60)	11
第11図 B 3号住居址 (1: 60)	12	第12図 B 4号住居址 (1: 60)	13
第13図 B 5号住居址 (1: 80)	14	第14図 B 6号住居址 (1: 60)	15
第15図 B 7号址 (1: 60)	16	第16図 B 2号住居址 (1: 60)	17
第17図 土器実測図	21	第18図 土器実測図	22
第19図 土器実測図	23	第20図 土器実測図	24
第21図 石器実測図	25	第22図 石器実測図	26
第23図 石器実測図	27	第24図 石器実測図	28
第25図 石器実測図	29		

P 1 A 1号住居址, P 2 A 2号住居址, P 3 A 3号住居址, P 4 A 4号住居址

P 5 A 5号住居址, P 6 A 6号住居址, P 7 B 1号住居址, P 8 B 3号住居址

P 9 B 4号住居址, P 10 B 5号住居址, P 11 B 6号住居址, P 12 B 7号址,

P 13 調査風景, 集石, 出土土器 P 14 出土土器 P 15 出土土器

第 I 章 遺跡の概要と調査経過

1. 遺跡の立地

十王堂坂の上遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字本郷 1,799 番地の 1 に所在する。

遺跡は、天竜川の河岸段丘上に位置し、南側の十王堂沢川、北側の沢によりできた舌状台地上にある。

遺跡に至るには、国鉄飯田線伊那本郷駅で下車し南東に約 500 m ほど歩いたところである。

2. 歴史的環境と調査経過

遺跡は、縄文時代の遺跡の多い本郷地区のほぼ中央に位置している。

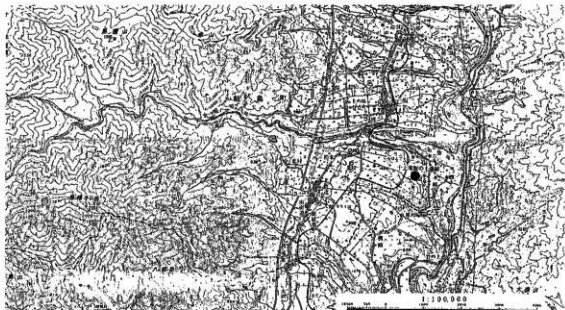
遺跡の西側には、丸山遺跡、原林遺跡、堤ノ窪遺跡、中山遺跡等の縄文時代中期の大集落跡が十王堂沢川をはさんで分布している。また南側には飯島城跡（鎌倉～室町時代）、寺平遺跡（中世・梵鐘鋳造跡）があり、遺跡の東側の段丘下には、中原遺跡、南羽場遺跡（縄文～中世）等の遺跡が分布している。

当該遺跡は、昭和56年度の県営ほ場整備事業の施行区域のため、南信土地改良事務所から調査の依頼があり、飯島町遺跡調査会では調査団を編成し実施した。

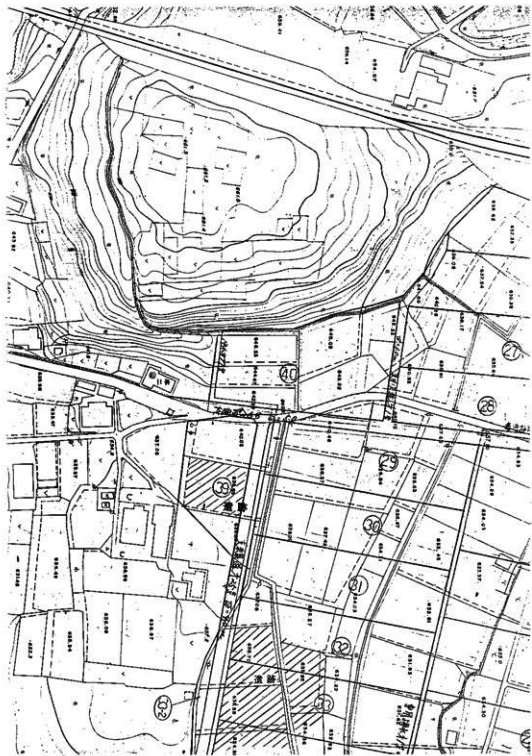
調査は、調査地区が広いため、ブルドーザーにより表土（耕作土）を剝いだうえで 2 m 四方のグリッドを設定し行なった。

遺物で主要なものは、平面図に出地点、出土高を記録した。

住居址の調査は、出土遺物を土層ごとに出土地点、出土高を記録したうえで覆土を取り除いた。



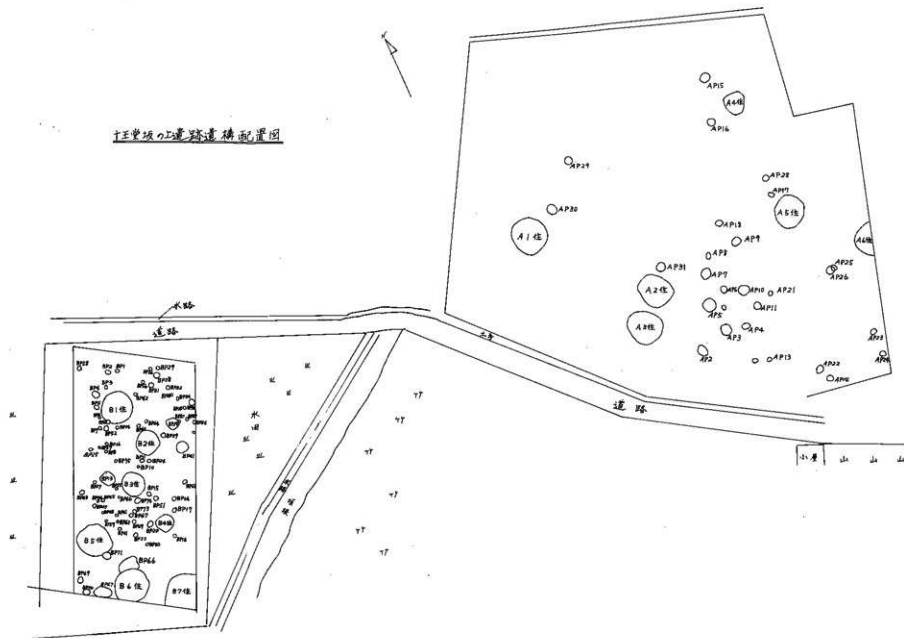
第 1 図 位置図 (1 : 100,000)



第2图 地形图 (1 : 2,000)

第二章 遺構

今回の調査で、A地区より縄文時代中期の住居址6箇所、土坑31箇所、B地区より縄文時代中期の住居址7箇所、土坑75箇所が確認された。



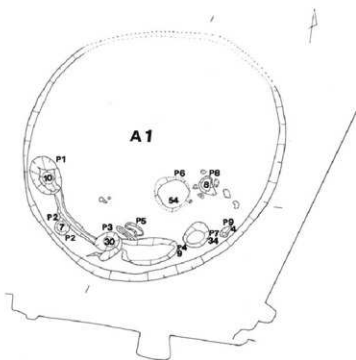
第3図 遺構配置図 (1:600)

1. 住居址

A 1号住居址

A地区西側より発見された円形を呈する大形の住居址である。北側壁は破壊されたため不明である。東西直径5.5mを計る。床はローム層を掘り込んで造られており、平坦で柔らかい。床面の南半分には大小の柱穴等が多くみられるが北側は水路跡があり、破壊が著しい。炬屋は確認されず、焼土もみられない。

遺物の出土は比較的少ない。



第4図 A 1号住居址 (1 : 80)

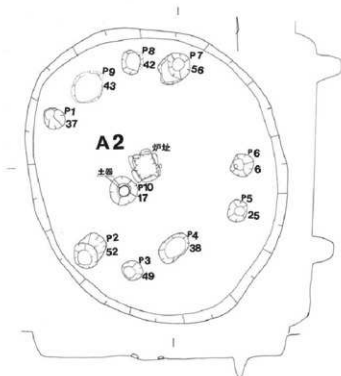


P 1 A 1号住居址

A 2号住居址

A地区中央やや南側より発見された楕円形を呈する住居址である。長径5.4m、短径4.5mを計る。床はローム層を掘り込んで造られており、凹凸がみられ柔らかい。住穴はP₁～P₉でいずれも比較的深い。炉址は住居址のほぼ中央に位置し、小規模な石を組み合わせて造られており、炉址付近の床面には焼土がみられる。炉址の南面にはピットがみられ、土器が掘えられていた。

遺物は、覆土上層より床面まで非常に多い。



第5図 A 2号住居址 (1:60)

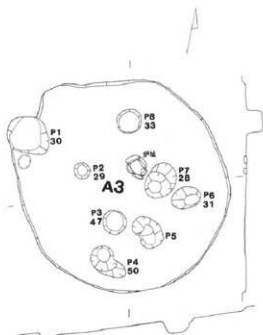


P 2 A 2号住居址

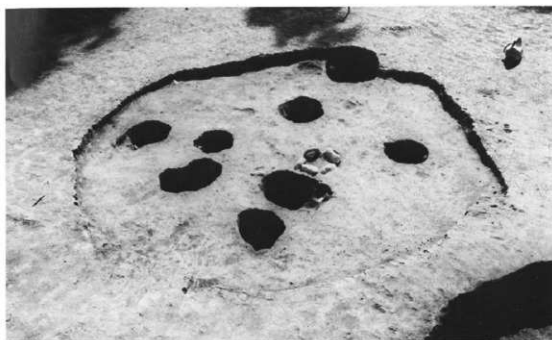
A 3号住居址

A地区の南側、A 2号住居址に隣接している。直径4.5mの円形に近い住居址である。床はローム層を掘り込んで造られており平坦で柔らかい。壁は上部を削り取られており、僅かにのこっている。柱穴はP₁～P₉があり主柱穴はP₁、P₆、P₈と思われる。炉址は中央やや東側に位置し小規模の石囲炉である。炉址付近には焼土がみられる。

遺物の出土は、覆土下層より床面まで多い。



第6図 A 3号住居址 (1 : 60)

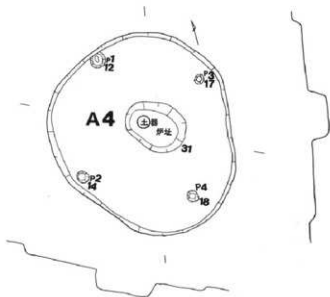


P 3 A 3号住居址

A 4号住居址

A地区の北側より発見された楕円形を呈する小形の住居址である。長径3.6 m、短径3.2 mを計る。床はローム層を掘り込んで造られており、平坦で各所に焼土がみられる。壁は水田により上部を削り取られており、僅かに残っているだけである。柱穴は、P₁～P₄で主柱穴と思われる。炉址は住居址のほぼ中央に1.1 m×0.8 mの楕円形の堅穴で、内部北寄りには土器が据えられている。

遺物は覆土、床面とも比較的少ない。



第7図 A 4号住居址 (1 : 60)

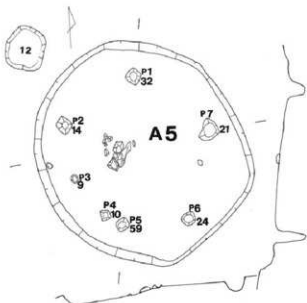


P 4 A 4号住居址

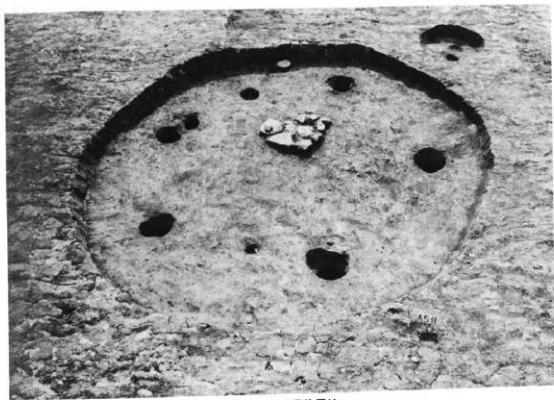
A 5号住居址

A地区中央東側より発見された楕円形を呈する住居址である。長径4.1m、短径3.6mを計る。床はローム層を掘り込んで造られており平坦で硬い。柱穴はP₁～P₇で主柱穴はP₁、P₂、P₃、P₄と思われる。炉址は確認されなかったが、床面中央西側に集石がみられ、炉址と何んらかの関係があると思われる。焼土はみられない。

遺物は覆土、床面とも多い。



第8図 A 5号住居址 (1 : 60)

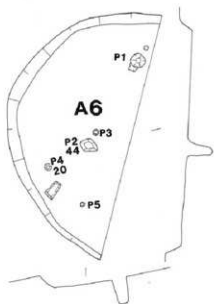


P 5 A 5号住居址

A 6号住居址

A地区東端より発見された住居址である。住居址東半分が未調査のため、全容がつかめないが大形の円形を呈する住居址と思われる。床はローム層を掘り込んで造られており、平坦で柔らかい。ピットはP₁～P₅で柱穴は明らかでない。炉址は調査範囲では確認されなかった。

遺物の出土は少ない。



第9図 A 6号住居址 (1 : 60)

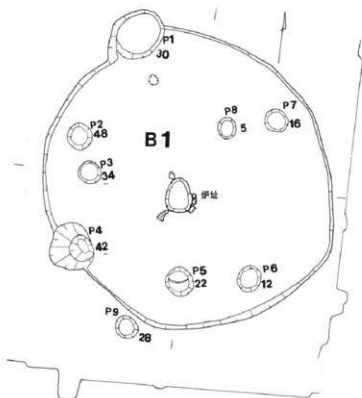


P 6 A 6号住居址

B 1 号住居址

B地区中央北側に位置する直径4.6～4.7 mの円形を呈する住居址である。床はローム層を掘り込んで造られており、壁は開田時代に住居址上部を破壊されたため僅かに残っているだけである。床は平坦であり踏み固められており焼土が各所にみられる。柱穴はP₁～P₉があり主柱穴は明らかでない。炉址は中央に位置しており、小規模な自然石を組み合わせた石囲炉である。

遺物は住居址覆土、床面とも多い。



第10図 B 1号住居址 (1:60)

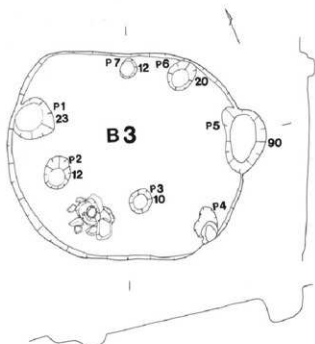


P 7 B 1号住居址

B 3号住居址

B地区のほぼ中央に位置する長径3.7m、短径3.3mの楕円形を呈する住居址である。床はローム層を掘り込んで造られており、凸凹があり、各所に焼土がみられる。壁は開田当時に上部が破壊されたため、僅かに残っているだけである。柱穴はP₁～P₇があり支柱穴は明らかでない。炉址は中央付近には見当たらないが、南西部に土器片を敷きつめ、その上に扁平な石を置いた遺構がみられるため、これが炉址として使用されたことも考えられる。

遺物は、覆土下層、床面とも多く出土している。



第11図 B 3号住居址 (1:60)

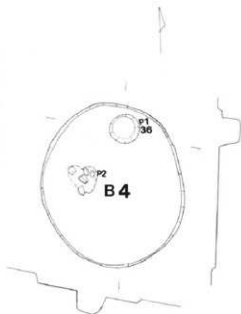


P 8 B 3号住居址

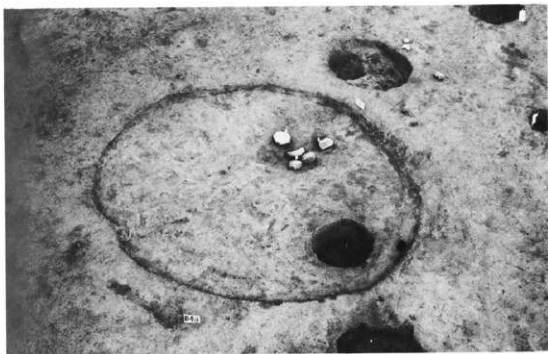
B 4 号住居址

B地区中央南側に位置する長径3 m、短径2.7 mの楕円形を呈する住居址である。床はローム層を掘り込んで造られており、壁は開田により大部分を削り取られている。床面は平坦で、比較的かたく、東側に傾斜がみられる。炉址は、はっきりしないが、中央西側に50cm前後の浅い窪みがあり、焼石がみられることから炉址として使用されたのではないかと思われる。柱穴は1箇所確認されたのみで他は不明である。

遺物は住居址覆土、住居址付近とも多い。



第12図 B 4号住居址(1:60)

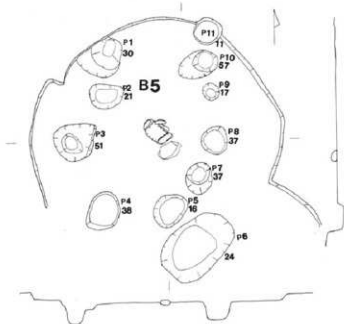


P 9 B 4号住居址

B 5号住居址

B地区中央西側より確認された。住居址は南側半分が破壊されたため形状は明らかでないが、恐らく直径5m～5m50cm前後の円形、楕円形を呈する住居址と思われる。床はローム層を掘り込んで造られており、北側の壁も下部が残されているのみである。床はかたいが凹凸がみられる。炉址は住居址のほぼ中央付近にみられ、自然石を利用した石囲炉である。また炉址の南側には炉に利用されたと思われる大形の自然石がみられる。柱穴はP₁～P₁₁がみられるがいずれも大形で深い。主柱穴は明らかでない。また住居址南側には大形の掘り込み(P₀)がみられるが、住居址に関連したものか否かは不明である。

遺物は住居址覆土、床面付近とも多い。



第13図 B 5号住居址 (1:80)

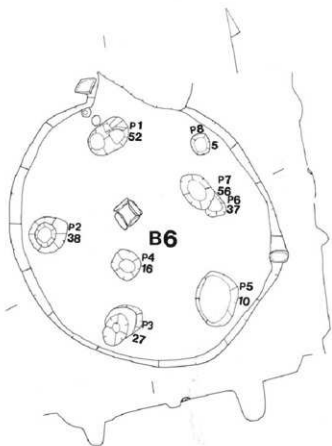


P 10 B 5号住居址

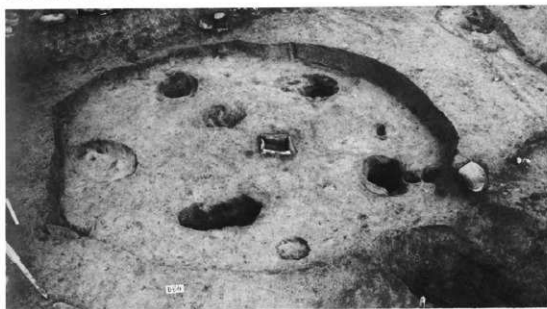
B 6 号住居址

B 地区、調査地区南端に確認された長径 4 m 50 cm、短径 4 m 10 cm の楕円形を呈する住居址である。床はローム層を掘り込んで造られており、平坦でかたい。壁は住居址全体にしっかりしており、ゆるやかな傾斜となっている。炉址は住居址のほぼ中央付近にみられ、4 個の小形の自然石を組み合わせたものである。焼土は炉址内部だけでなく、住居址床面の各所にみられる。柱穴は $P_1 \sim P_8$ が確認されたが、柱穴の大きさ、深さよりみて、主柱穴は P_1, P_2, P_3, P_7 の 4 箇所と思われる。住居址の北側には住居址の一部を欠く形で大形の土壇がみられるが住居址とは直接関連がないものと考えられる。

遺物は覆土、床面とも多い。



第 14 図 B 6 号住居址 (1 : 60)

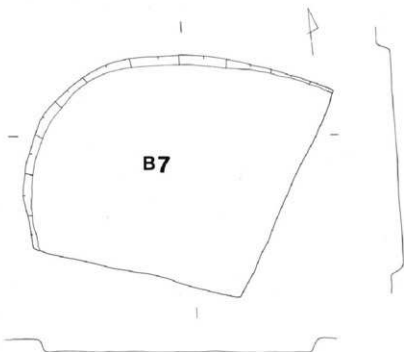


P 11 B 6 号住居址

B7号址

B調査地区南端に位置する。遺構は4分の1程度の調査にとどまる。底部はローム層を掘り込んで造られており、平坦でやわらかい。底部からは炉址、柱穴、焼土等検出されず、住居址となりうるか疑問である。

覆土より遺物の出土は少ない。



第15図 B7号址 (1:60)

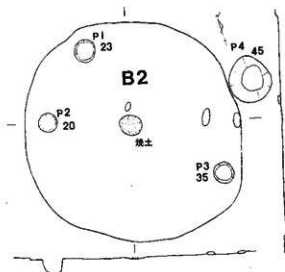


P 12 B7号址

B 2号住居址

B地区中央北側に位置する直径3.5mの円形を呈する住居址である。住居址は開田により大部分破壊され、壁も僅かにのこされているのみである。床は平坦で柔らかい。床面中央付近は窪み、焼土がみられ炉址と考えられる。住穴はP₁～P₃がみられる。

遺物は住居址床面より多い。



第16図 B 2号住居址 (1:60)

2. 土 塚

(A地区)

A地区より31個の土塚が検出された。土塚は20cm～80cmの円形、楕円形を呈する。土塚の分布はA₂、A₃、A₄号住居址の南側に集中してみられ、A₁、A₄号住居址付近、調査地区北側には少なかった。遺物の出土は全体的に少ない。

(B地区)

B地区からは75個の土塚が検出された。土塚は調査地区全域に分布し、大きさ、形態ともまちまちである。土塚は、円形、楕円形のものも多く規模もBP13、38、41、66、67のように2m～3mの大型で深いものもみられる。

遺物の出土は土塚覆土、付近とも多くBP12、16、28、38、41、42、52、55、64、66、68からは復元可能土器が出土した。また石器の出土は比較的少なく、16個の土塚より石器、黒曜石片が出土した。

BP66はB6号住居址に隣接した南北に長い楕円形の土塚である。土塚は南側が深く、覆土からは多量の焼土と約10個体の土器が出土した。

B 地区土坑一覽表

番号	形状	土坑の状況	遺物出土状況	番号	形状	土坑の状況	遺物出土状況
B 1	円形	柱穴状の深いピット		39	円形	柱穴状の深いピット	石器出土
2	楕円形	柱穴状の深い比較的大きなピット		40	楕円形		
3	楕円形			41	円形	大形で深い	復元可能土器1点、土器片多数
4	円形	大形で、断面が二段	土器片多数、石器出土	42	円形	大形で浅い	復元可能土器1点
5	円形	浅い		43	楕円形		
6	円形	浅く小形		44	円形	浅い	
7	円形	浅い、覆土内自然石	石器、黒曜石片出土	45	円形	浅い	
8	円形	浅い		46	円形		
9	円形	大形で浅い		47	楕円形		
10	円形	断面すり鉢形		48	円形	柱穴状	
11	半円形			49	円形	断面南西部が深い	
12	楕円形		復元可能土器	50	楕円形	断面複雑	土器片2点、石器1点
13	不整形	断面複雑、大形	石器(石鏃)出土	51	円形	底部凹みがみられる	
14	楕円形	断面すり鉢形		52	円形	比較的浅い	復元可能土器3点、土器片多数
15	不整形	断面複雑		53	円形		
16	方形	断面複雑	復元可能土器出土	54	楕円形	断面複雑	
17	円形	浅い	土器片2点出土	55	円形	小形	復元可能土器1点出土
18	双円形			56	円形	比較的浅い、底部西側に傾斜	
19	楕円形			57	円形	小形	
20	円形	断面複雑	土器片、石器出土	58	楕円形		
21	円形			59	楕円形		
22	円形	浅い		60	円形		黒曜石片出土
23	楕円形	断面北側が深い		61	楕円形		
24	円形			62	楕円形	浅い	
25	楕円形			63	円形	断面東側深い	黒曜石片、土器片4点
26	円形	浅い		64	円形	断面北側深い	復元可能土器、石器1点
27	楕円形			65	楕円形		石器3点出土
28	楕円形	大形	復元可能土器出土	66	楕円形	大形で深い、焼石、焼土多量出土	復元可能土器数点、石器出土
29	円形	大形	土器片5点、石器2点出土	67	楕円形	大形、石が多数検出	土器片多数出土、石器出土
30	円形	小形で浅い		68	円形	小形で浅い	復元可能土器1点出土
31	円形			69	円形	焼石出土	黒曜石片出土
32	楕円形	浅い、断面複雑、焼石あり		70	円形		
33	円形	小形	黒曜石片、土器片出土	71	楕円形	断面複雑	
34	不整形	浅い		72	楕円形		
35	円形	断面複雑	土器片、石器出土	73	楕円形		
36	円形		石器出土	74	円形		
37	楕円形	断面二段、断面複雑		75	楕円形		
38	円形	大形で浅い	復元可能土器3点、土器片多数				

3. その他

(1) 集石

B調査地区中央南側に集石がみられる。集石は黒褐色土層に10~30cmの自然石を数個ないし十数個まとめたものである。

集石内からの遺物の出土は少ない。

第三章 遺物

1. 土器

第17図1・2は竹管文土器、3は口縁部帯に縄文を施した勝板Ⅱ式系の土器。4は粘土紐を貼付した曾利Ⅰ式の鉢形土器。5～10は連続爪形文が主体の勝板Ⅱ式併行の土器。11・12・14・15は口縁部垂文帯で頭部に竹管文を施した勝板Ⅱ～Ⅲ式系の土器。13は深鉢形の勝板Ⅱ式土器、16は連続爪形文の勝板Ⅱ式の深鉢形土器。17は無文に近い深鉢形土器の底部、18～20は平出3A式に比定される土器。23・24は連続爪形文の藤内Ⅰ式に比定される土器。25は曾利Ⅰ式に類似する土器と思われる。28は連続爪形文の深鉢形土器で勝板Ⅱ式。29は半割竹管文の土器である。31～35はメンコと呼ばれる土製品である。36は無文碗形土器、37は勝板Ⅰ式の沈線文土器。第18図40は連続爪形文藤内Ⅰ式と思われる土器、44・45は半割竹管文や連続爪形文の中期初頭形式土器。47は渦巻文や連続爪形文の藤内Ⅰ式に比定される土器。48は竹管文爪形文が施された中期初頭の土器。50～53は隆帯に爪形文や竹管文が施された藤内系の土器と思われる。54は井戸尻Ⅰ式に併行すると考えられる土器。55は曾利Ⅲ式に比定されると考えられる土器。58は渦巻文や沈線による楕円区画内に結節縄文が施された曾利Ⅲ式土器。59は連続爪型文と竹管文が施された中期初頭形式土器。60は曾利Ⅱ～Ⅲ式土器。64は連続刺突文が施された縄文中期初頭のものと考えられる。第19図65・66・68～74・77は沈線による楕円区画文や渦巻文等の深鉢形土器で縄文中期曾利Ⅲ式に比定されるもの、75は浅鉢曾利Ⅱ～Ⅲ式と思われる。76は縄文地に円形文様の東京都植原遺跡出土の土器に類似している勝板Ⅱ式土器。78は口縁部に刺突文や連続爪形文がめぐり、胴部に粘土紐による抽象的な文様のある中期中葉の深鉢形土器、79は頸部に刺突文と結節縄文が付された曾利系の壘形土器。第20図80はワラビ手文が付された藤内Ⅰ式土器。81は連続爪形文や三角文が施された藤内Ⅰ式土器。82は無文の藤内Ⅰ式と考えられる深鉢形土器。83～85は勝板Ⅰ式併行土器。86は底部にふくらみをもつ勝板Ⅱ式に比定される土器。87はワラビ手文が付された新道式に比定される土器。88は頸部の隆帯に連続指圧痕を付した土器。89は地文が縄文で楕円形の区画内に結節縄文が施された曾利Ⅱ～Ⅲ式土器で吊り手部分が欠けている。90は無文深鉢形土器で、曾利Ⅱ～Ⅲ式土器と思われる。91は、胴部に楕円形の区画がもうけられ中に結節縄文のみられる曾利Ⅱ～Ⅲ式の土器である。

2. 石器

今回の調査で合計 523 個の石器が出土した。内訳は完形品 217 個、欠損品 306 個である。石器の種類、遺構別の内訳は一覧表のとおりである。最も出土数の多い石器は打製石斧で、ついで横刃形石器、黒曜石片、石鏝とつづいており、石皿、凹石、石棒、ドリル、スクレーパー等の出土は少なかった。特に石鏝は町内の遺跡の中では著しく多く、注目される。住居址別では A 2 号住居址からの石器の出土が特に多く、A 5 号、B 3 号住居址からの石器の出土は少ない。土城からの石器の出土は少なく打製石斧、横刃形石器が主である。

3. その他

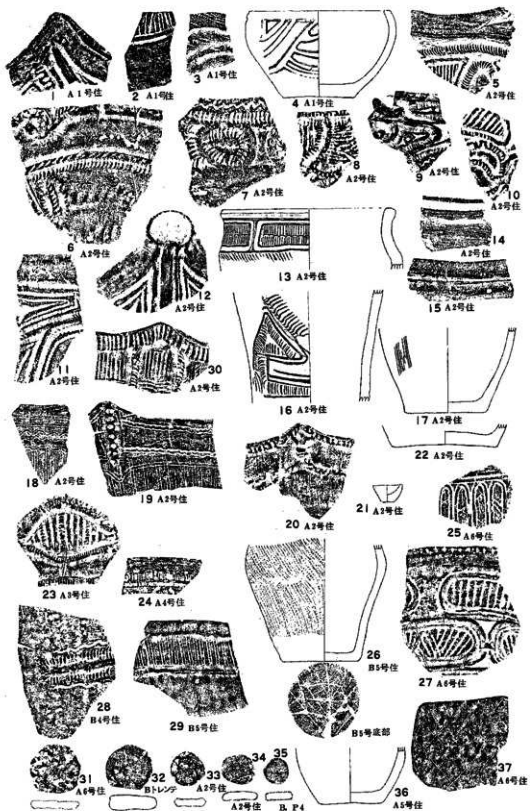
(1)土製品 調査地区内より 5 個の円盤型土製品（メンコ）が出土した。

(2)人 骨 B 3 号住居址内の土城より人骨 1 個体分出土した。人骨については現在信州大学において調査中である。

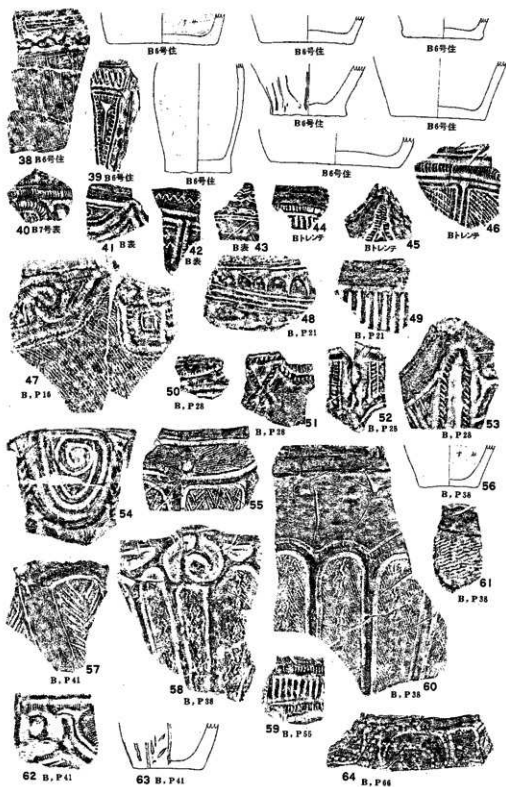
石器一覧表

※（ ）は完形品内数

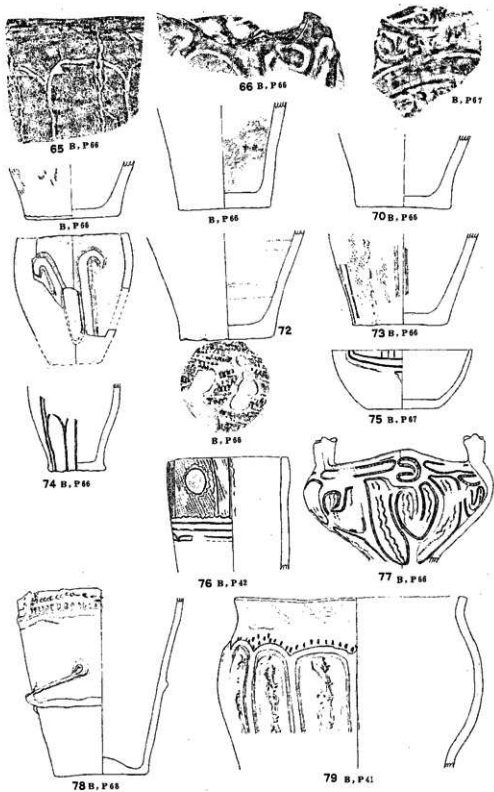
遺構 番号	打製 石斧	磨製 石斧	石匙	石鏝	石鏝	磨石	横刃形 石器	石皿	凹石	スクレ ーパー	ドリル	石棒	黒曜 石片	その他
A 1 住	4 (3)	1 (1)		1 (1)	2 (1)		3 (1)							
A 2 住	24(0)	4	5 (1)	12(0)	2 (2)	4 (2)	21(0)						12	
A 3 住	2 (1)	2	1 (1)	1	1 (1)		7 (4)							
A 4 住	4 (1)				1 (1)		1 (1)							
A 5 住	2													
A 6 住	2 (1)		3 (3)				1 (1)							
A 表探	55(0)	7 (2)	3	12(0)	1 (1)	5 (2)	15(0)		2 (2)				32	3
B 1 住	1 (1)	1 (1)			1 (1)		3 (3)							1
B 2 住	2 (2)		1 (1)	2 (2)			1							1
B 3 住							1 (1)							
B 4 住	4 (1)					1	1							
B 5 住	5 (1)			4 (4)	2 (1)		10(5)						19	
B 6 住	6 (3)	2 (1)												
B 7 住							1 (1)						4	
集 石	6 (2)	1		2 (2)			4 (2)	3 (2)						
B P 4	2		1											
B P 7	1												1	
B P 13					1 (1)									
B P 20	1													
B P 29	1					1								
B P 35							1 (1)							
B P 36	1 (1)													
B P 38	2				1 (1)		1							
B P 39	1 (1)										1 (1)			
B P 41	1	2					1						1	
B P 52							2 (1)							
B P 60													1	
B P 64	1 (1)													
B P 65	2 (1)													
B P 66	5 (2)						3 (2)							
B P 67	2		1 (1)	1 (1)	1 (1)									
B 表探	42(0)	21(4)	5 (4)	24(2)	4 (2)	6 (6)	12(8)	6 (3)				4	8	2
合 計	179 (63)	41(9)	20(1)	59(5)	17(3)	17(0)	89(6)	9 (5)	2 (2)		1 (1)	4	78	7



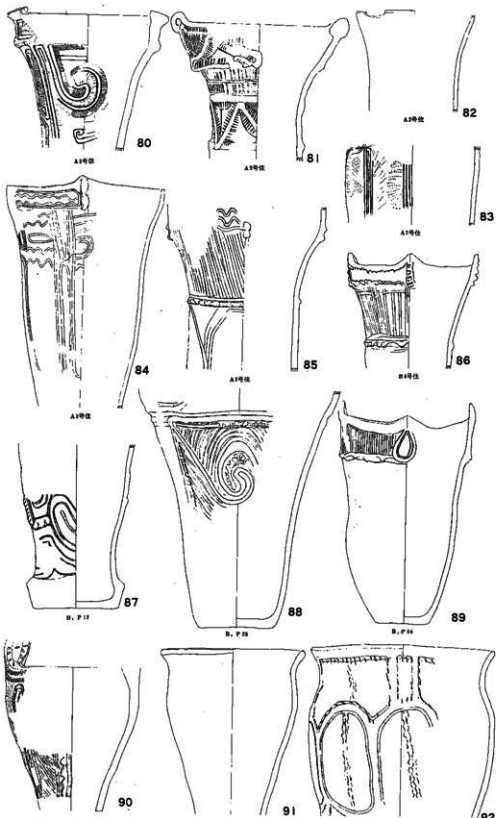
第17图 土器实测图(1:2)

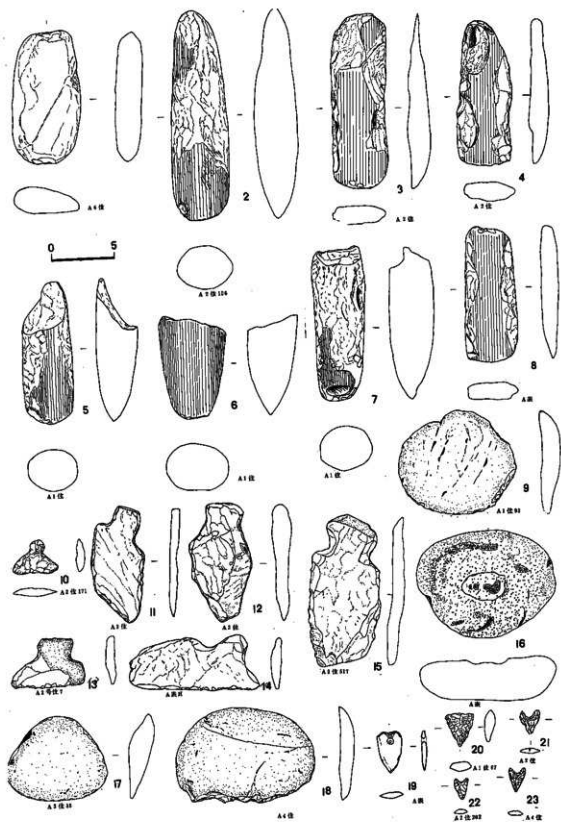


第18図 土器実測図(1:2)

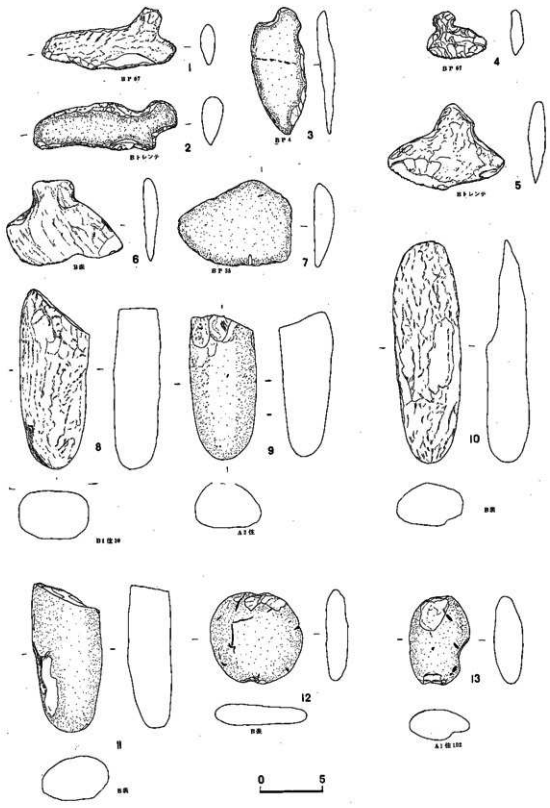


第19圖 土器実測圖(1:4)

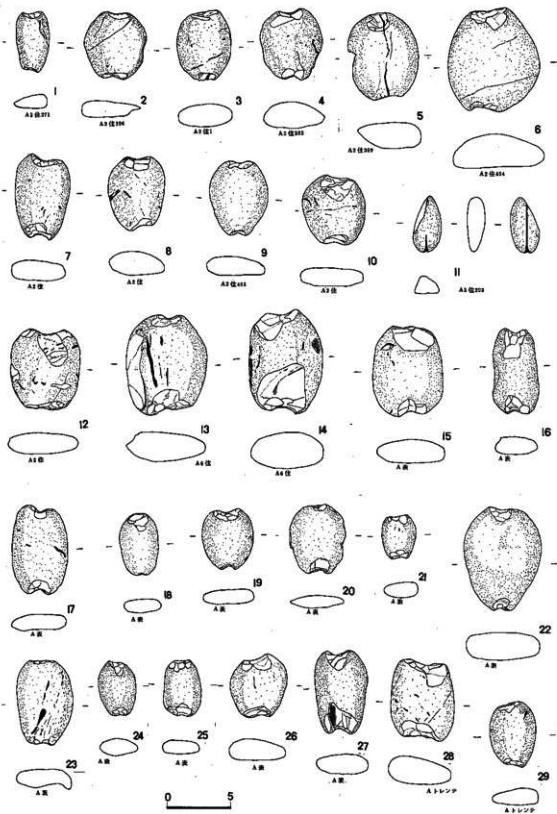




第21圖 石器美術圖 (1:3)



第23図 石斧実測図 (1:3)



第24図 石器実測図 (1:3)

第四章 まとめ

今回の調査によって得られた考古学上の成果は、予想以上のものがあつた。ここではそのなかの特に主要と思われる2・3の点について述べ、まとめとしたい。

調査の内容については前章で述べてあるので省略する。

1. 本遺跡のおかれていた自然的環境について述べると、十王堂坂の上遺跡は天竜川の右岸段丘上にあつて、標高630～638mの間に分布している。この台地は東側に向つて $1^{\circ}40'$ ぐらいの傾斜をなし、遺跡は舌状面に立地する。天竜川の面より数えて3段目の河成段丘にあつて、遺跡の南は本郷の集落の西方に源を発する十王堂沢川が流れ、北側の凹地とに挟まれた台地にあつて、縄文時代の人々の生活には恵まれた環境であつたと思われる。十王堂坂の上遺跡は東西約200m、南北100mの範囲にわたつていた遺跡と推定される。今回の調査は、住宅地に続く山林や畑地等の除外地を除いた箇所での発掘調査を実施したが、遺跡の主要部分は、除外区域にあるのではないかとと思われる。

2. 十王堂坂の上遺跡における集落の在り方は、今回の調査だけでは明らかにすることはできないが、調査の過程から東の地区をA地区とし、西の地区をB地区として調査を行った。その結果としてA地区からは縄文中期の住居址6軒と土坑31基が検出された。B地区からは縄文中期の住居址7軒と土坑75基が検出された。これらの遺構の分布状態からすると、A地区では遺構が更に東側にのびていたと思われるが、開田の折破壊されたものと考えられる。北側は凹地周辺に達しているため、範囲は今回調査したあたりまでと思われる。南側は畑地と山林になっているが、畑地には遺物が多いので集落は南にのびているものと思われる。B地区では北側にのびていると考えて調査を行つたが、水田造成時点で破壊されてしまったのか遺構の検出はなかつた。西側はやや高くなつていて今回調査ができなかつたが恐らく西側にも遺構は続いているのではないかとと思われる。南側は急傾斜になっているため、住居址の存在については問題がある。が住居址以外の遺構の存在は考えられる。東側は山林と住宅のため調査はできなかつた。このことから十王堂坂の上遺跡の集落の範囲は今回調査した地域より南に広がっていることは確かである。また住居址や住居址以外の遺構も恐らく相当数に達するものと予想される。

3. 集落の存在した時期であるが、遺物を整理した段階では縄文中期初頭型式である梨久保期の要素をもつ土器をはじめとして勝飯Ⅱ式（藤内Ⅰ式）から井戸尻期が中核をなしている遺跡である。それに縄文中期後葉の曾利Ⅱ～Ⅲ式期がわずかではあるが認められる遺跡である。伊那谷においては、縄文中期初頭の遺跡は数少ないところから貴重な遺跡の一つとして注目されるものと考えられる。

出土した遺物は飯島町教育委員会が陣嶺館に保管してある。

最後に十王堂坂の上遺跡の調査に参加された皆様に心からお礼を申し上げる次第であります。

（調査団長 友野良一）



調査風景



集石



A 1号住居址出土



B 5号住居址出土



B P 28 出土



B P 38 出土



B P 68 出土



B P 68 出土

P 13 調査風景、集石、出土土器



A 2 住



A 2 住



A 2 住



B 4 住



BP 42



BP 28



BP64



BP68



BP66



BP66



BP66



BP66

P 15 出土土器

飯島町遺跡調査会組織

会 長	熊 崎 安 二	(教 育 長)
理 事	片 桐 修	(飯島町文化財調査委員)
	宮 下 静 男	(")
	北 原 健 三	(")
	桃 沢 匡 行	(")
	松 崎 研 定	(")
	中 島 淑 雄	(")
	片 桐 佳 彦	(")
	小 林 嘉 男	(")
監 事	池 上 勇	(飯島町監査委員)
	吉 沢 益 美	(")
幹 事	大 石 文 夫	(飯島町教育委員会教育次長)
	米 沢 長 実	(" 係長)
	伊 藤 修	(" 主事)
	小 林 洋 子	(" 主事)

(発掘調査団)

団 長	友 野 良 一	(日本考古学協会員)
調 査 員	伊 藤 修	(飯島町教育委員会主事)
調 査 補 助 員	北 原 甲 子 三	(飯 島 町)
	横 田 愛 子	(")

(参加者名簿)

伊藤幸一、森谷慶福、宮下きくゑ、原ふみ子、山口藤子、三松ますみ、
米山保子、林晴子、松下国夫、桃沢和子、桃沢幸一、米山千勢、坂下
はま子、米山武夫、松下弘子、桃沢照子、宮下喜代子、新井勝、林孝
子、河野光臣、

十王堂坂の上遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和57年3月20日 印刷
昭和57年3月25日 発行

発行所 長野県上伊那郡飯島町

印刷所 藤原印刷株式会社
松本市新橋7-21
☎0263-33-5092 代

